

知覚動考

「誰一人取り残さない 子供が育つ学校づくり」

寒河江市立南部小学校
校長室だより
2025.4.18

行動の裏側にあるもの～見えないものをどれだけ『みとれる』か～

「**藁（ワラ）一本でラクダの背が折れる**」ラクダの背中にたくさんの荷物を積んでいって限界に達したとき、一本のワラを載せてしまったら、その重みでラクダの背骨が折れてしまった。そういうことを物語っている慣用句です。

この慣用句を学校教育に当てはめてみました。学校生活の中で様々な**トラブルや問題が当たり前**のように起こります。いじめ、不登校（登校渋り）、子供同士のいざこざ等々。それらの原因を探り、保護者や外部機関と協力しながら対応しているところです。

ここで、これらの対応の在り方について振り返ってみます。「子供が学校に行きたくないと言っている。」という訴えがあった場合、よく大人が聞くことが、「どうして学校に行きたくないの？」だと思えます。（当然、原因を聞くことも重要な対応であることは承知しています。）子供は、「**きっかけ**」となった**原因**を口にします。上記の慣用句で言えば、「藁」にあたります。「藁」を置いたのは誰なのか。どうして「藁」を置いたのか。犯人捜しのようなことが行われるのも珍しくはありません。一つの原因を取り除いても、次から次へとその原因（藁）は出てきます。

しかし、我々大人がすべきことは、これまでこの子供は「たくさんの重い荷物をもたされていたのかもしれない」、という見方もすることではないのでしょうか。上記のラクダと一緒に、子供たちは、それまで辛い思いをしてきているにもかかわらず、誰にも気付いてもらえなかった結果、あることがきっかけで問題（と大人が思っている）行動が表面化してしまう場合が多々あると考えています。子供はそうなる前に、無意識で**たくさんのサイン**を大人に出しているのですが、忙しい、余裕がないという理由で、大人がそれに気付いていないのかもしれませんが。そのためにも、まず必要なのは、「**子供のサインに気付く余裕をもつこと**」と、「**どうしてこの子は、こういう行動をするのだろう**」と、表面的には見えない**裏側にあるものを見ようとする**努力を続け、子供に関わる大人としての『**みとる目（観察眼）**』を養っていくことです。

暴力をふるう子は、これまで多くの人から物理的暴力だけでなく、言葉の暴力を受けてきたから、**自分が傷つく前に人を傷つけてしまう**という話を聞いたことがあります。暴力はいけないことですが、どうしたら暴力をなくすことができるのか、どうしたらその感情を押さえさせることができるのかだけではなく、周りの人は、無意識にこの子を傷つけてはこなかったのかについても、振り返りたいものです。

子供たちの裏側にあるものを見ることは非常に困難だということは認識しています。しかし、この力（みとる目・観察眼）こそ、子供に関わっている一人の大人として、また、子供の幸せを考えていく上でとても大切なものであると確信しています。

